

表2 本誌連載予定の人獣共通感染症と主な症状

微生物	病名	症 状					
		体温	神経系	呼吸器系	消化器系	外科系(咬・掻傷)	その他
ウイルス	狂犬病	上昇	咬傷部の疼痛 知覚異常 恐水症、急性脳炎				動物と接触歴 (70~80%)
クラミジア	オウム病	高熱		重篤な異型 肺炎(40歳以上) (レントゲン所見: スリガラス様陰影)			ベア血清にて判定、 死亡年間約1人、 動物との接触情報 が重要
リケッチャ	Q熱	発熱		(急性)インフルエンザ 様症状→不定愁訴 (微熱、頭痛等)、鬱病			(慢性)心内膜炎、 肝障害、骨髄炎、 動脈炎
	猫ひっかき病	発熱			所属リンパ節 腫脹型		非リンパ節腫脹型 (不明熱、肝膿瘍、 脾膿瘍)
細菌	パスツレラ症	発熱	脳炎、髄膜炎	副鼻腔炎、咽喉頭炎 気管支肺炎、膿胸		化膿、蜂窩織炎 骨髄炎	敗血症、膀胱炎 急性腹症
	サルモネラ症	発熱	髄膜炎		胃腸炎		敗血症
寄生虫	犬蛔虫・猫蛔虫症	発熱	脳髄膜炎、眼病変	喘息様発作	食欲不振		幼児に多い、肝腫大
	エキノコックス症	発熱	神経症状	血性痰	上腹部不快感		あらゆる部位に転移
	トキソプラズマ症	発熱	水頭症、眼病変等				流産、リンパ節炎等

表3 人獣共通感染症の動物群別重要度分類 (出典) 吉川泰弘、輸入動物によるエマージングウイルスへの対策—感染症予防とエマージングウイルス—、東京理科大学出版会 SUT Bulletin 2000 2月号一部改変

動物群	対策を必要とする動物		感染症の重要性				
			☆☆☆☆	☆☆☆	☆☆☆	☆☆	☆
I	霊長類 (ヒトを除く)		エボラ出血熱 マールブルグ病	Bウイルス病	細菌性赤痢、赤痢アメーバ、 モンキーボックス、 結核、デング熱、黄熱		糞線虫症 ジアルジア症
II	鼠属、節足動物、 齧歯類(兎、プレーリードッグ、 マストリス等を含む)	II a 侵入動物		ラッサ熱 ペスト ハンタウイルス肺症候群 腎症候性出血熱 クリミア・コンゴ出血熱	リンパ球性脈絡髄膜炎 トリパノソーマ症 デング熱 黄熱 マラリア等(注) リフトバレー熱	発疹熱、発疹チフス 日本紅斑熱 ツツガムシ病 鼠咬症、Q熱 ライム病 日本脳炎 リーシュマニア症 回帰熱 サルモネラ症	
		II b 研究用 愛玩用		ラッサ熱、ペスト ハイタウイルス肺症候群 腎症候性出血熱	リンパ球性脈絡髄膜炎	発疹熱 日本紅斑熱 鼠咬症	
III a	ネコ アライグマ スカンク等			狂犬病		野兎病、ライム病、 レプトスピラ症、 仮性結核、トキソプラズマ症	トキソカラ症 パスツレラ症 アライグマ蛔虫症
	キツネ			狂犬病		エキノコックス症 (多包虫症)	
	コウモリ			狂犬病 狂犬病関連ウイルス病 ウマモービリウイルス病			
	他に属さない人が飼育 する可能性のある動物			(狂犬病)		サルモネラ症	
	鳥類 イヌ			(クリミア・コンゴ出血熱)	オウム病	ライム病	クリプトコックス症
III b				狂犬病		トリパノソーマ症 レプトスピラ症 仮性結核 ライム病 リーシュマニア症 野兎病	ジアルジア症 トキソカラ症 糞線虫症 ブルセラ症 パスツレラ症
IV	家畜 (ブタ、ウシ、綿羊・山羊、ウマ) 家禽			狂犬病	リフトバレー熱、 結核	Q熱、炭疽、鼻疽、 ブルセラ症、腸管出血性大腸菌感染症、 サルモネラ症、エルシニア症、リステリア症、 類丹毒、レプトスピラ症、ライム病、 トキソプラズマ症、エキノコックス症 (単包虫症)	クリプトスポリジウム症、 ジアルジア症、 肝蛭症

(注) バンクロフト糸状虫症、マレー糸状虫症、オンコセルカ症、ロア糸状虫症等を含む。——: 今回連載予定の感染症